

ボン教の神がみ

森 雅秀

1. はじめに

ボン教の寺院の内部（図 1）にはさまざまな神々が祀られている。あるものは釈迦や観音に似た柔和な姿を持ち、あるものは多面多臂、半裸で忿怒の姿で表されている。チベットの仏教と同様に、ボン教にも壮大なパンテオンと多様な神々のイメージがあることがわかる。ここでは、ボン教のパンテオンを構成する神々や祖師たちのうち、これまでの章では取り上げられなかったものたちを中心に、その概要を示そう。

ボン教のパンテオンを便宜上、寂静尊、忿怒尊、護法尊、成就者・高僧、その他の五つに分類する。

はじめのふたつのグループは、ボン教のパンテオンの中心を占める神々で、その外見的特徴から、穏やかで柔和な姿の神（zhi ba）と、恐ろしく威嚇的な姿の神（khro ba）に分かれる。外見は正反対であるが、ときとして、同じ神がそれぞれ異なる姿をとると解釈されることもある。この二種の分類はチベット仏教でも一般的で、とくにニンマ派では主要な尊格をまとめて「寂静尊忿怒尊百尊」というグループが信奉された。ボン教とニンマ派は実践法や教義などでも共通の部分が多く、神々の分類法も共有されていたのであろう。

護法尊はパンテオンの中では下位に位置づけられる神々で、寂静尊や忿怒尊の眷属となることも多い。チベット仏教においてもさまざまな護法神が信仰されているが、その多くがもともとはチベット固有の神々である。ただし、ボン教の神々はその大半がそもそもチベット土着の神であるため、起源のみから護法尊とみなすことはできない。外見上、護法尊と忿怒尊には大きな違いはなく、一般に忿怒形でグロテスクな姿をとる。仏教の護法尊と共通するものはあまりいないが、例外的に仏教と同じ四天王がボン教の寺院でも入り口近くに祀られている。また、四天王のうち、北に位置する毘沙門天もボン教の重要な護法尊である。

ボン教の歴史上の祖師たちや伝説的な修行者たちも、絵画や彫刻によって表され、ボン教の寺院に祀られている。単独の作品の他に、複数の人物がグループを形成したり、集会樹といわれる独特の形式で描かれることがある。

その他の中には、六道輪廻図やマンダラ、オルモルンリン図などが含まれる。

2. 寂静尊

ボン教のパンテオンにおける最も重要な神々は、「四至上尊」（図 2）と呼ばれる四尊の寂静尊である。その名称は以下のとおりである。

サティク・エルサン

シェンラ・オーカル

サンポ・プムティ

トンパ・シェンラブ

これらの四尊は、順にユム (yum)、ラ (lha)、シーパ (srid pa)、トンパ (ston pa) という略称でも呼ばれる。「ユム」(母) という略称からもわかるように、はじめにあげられるサティク・エルサンのみは女神で、他はいずれも男神である。これらの神々は単独でも信奉されるが、グループを構成して、四幅で一具のタンカに描かれたり、寺院に祀られたり、経典の挿絵に描かれたりする。持物や印相、身色を異にする点を除けば、四尊のあいだでその姿はきわめてよく似ている。

これら四尊の最後に位置するトンパ・シェンラブ (図 3) は、ボン教の開祖とみなされるシェンラブ・ミポチェのことである。ボン教徒にとっては歴史上の実在の人物であるが、実際は「最も優れたシェン」という意味にすぎない。シェンというのは古代チベットの氏族名もしくは職能集団の名称で、死者儀礼を司る者たちであったと考えられている。敦煌文書では、ボンポ (ボン教徒) と「シェンポ・パワ」(代表的なシェンの人) は、同義で用いられている (山口 1988:168)。

「四至上尊」よりもさらに上位に位置する神にクントウサンポ (Kun tu bzang po) がいる。仏教の菩薩である普賢と同じ名称で、ニンマ派がたてる至高神も法身普賢と呼ばれ、何らかのつながりが予想される。尊容も両者でほぼ共通である。ボン教のマンドラには、中央にクントウサンポをおき、この四方を四至上尊が取り囲むものがある。仏教のマンドラで、大日如来を四仏が取り囲む形式に、おそらく相当するのであろう。

このほかに以下のような神々が寂靜神として重要である。

ナムパル・ゲルワ (図 4)

ナムケン・ゲルワ・シェンラブとも呼ばれる。ボン教の開祖トンパシェンラブが、異教徒や悪魔を降伏させたときの姿といわれる。結跏趺坐で坐り、右手を上方に振り上げ、左手は左膝の上に置くという姿勢をとるが、この手の構えはボン教や仏教の僧院内で、僧侶たちが問答をするときのポーズにもよく似ている。表情は目をつり上げ、口を半開きにし、やや忿怒の雰囲気を示している。豪華な宝冠をいただき、瓔珞や臂釧、腕釧などで身を飾る。表情を別にすれば、仏像でいうところの「菩薩形」にほぼ匹敵するスタイルである。本堂の主尊としてこのナムパル・ゲルワを祀るボン教寺院も多い。

シェーラブ・マワセングー (図 5)

ボン教の諸尊の中でもとくに人気の高い神で、「マセン」という略称で親しまれている。右手は剣を振り上げ、左手は胸の前で植物の茎を持つ。この植物は体の左側に伸び、その先端は花が開き、お経が置かれている。これはチベットの文殊像の典型的な尊容で、明らかにそれを

意識したものである。名称についても、「般若」(シェーラブ)、「語」(マワ)、「獅子」(センゲー)は、いずれも文殊と密接に結びついた言葉である。

シェーラブ・チャンマ (図6)

ユムチェン・シェーラブ・チャンマ (大いなる母である般若チャンマ)、あるいはゲルユム・チャムマ・チェンモ (偉大なチャムマ王母)ともいうが、一般には単にチャムマとのみ呼ばれる。名前のおり女神であり、仏教パントオンにおけるターラーに近い存在と考えられる。また、シェーラブ・チャンマという名称を持つことから、シェーラブ・マセンとの関係も予想される。アトリビュートとして右手に財宝の壺、左手に鏡を持つ。左手に植物を持ち、その上に鏡を置く形式のものもある。チャンマはすでに述べた「十二儀軌」の中にも含まれる。

クンサン・ゲルワ・ギャンツォ (図7)

この神の尊容は、あきらかに仏教の十一面千手観音を意識したものである。直立した姿勢をとり、体の左右には千本の手を広げる。11の顔は下から順に、5、3、1、1、1とならぶ。千の手のうち、5組10本のみを大きく描き、このうち主要な2臂は胸の前で合掌し、両手のあいだに日輪と月輪をはさんで持つ。この神も「十二儀軌」のひとりである。

クンサン・ゲルワ・ドゥーパ (図8)

11つの顔、10の腕をそなえ、結跏趺坐で坐る。おそらくクンサン・ゲルワ・ギャンツォと同一の尊格であるが、坐像である。

この他、単独の寂静神にはクンサン・アコル、チメ・ツクプ、ティツク・ゲルワなどがある。寂静尊には複数の神で構成されたグループもある。そのうち、もっとも重要なものは、すでに紹介した「十二儀軌」である。死者儀礼と関係の深い「六人の教導のシェン」とよばれるグループもある。衆生が輪廻する六つの世界(六道)を司る神々で、以下の六尊で構成される(括弧内は該当する世界)。

- サンワ・ガンリン (地獄)、
- ムチョ・デムドゥク (餓鬼)
- ティサン・ランシ (畜生)
- サンワ・ドゥーパ (人)
- チェゲル・ワルティ (修羅)
- イエシェン・ツクプ (天)

これらの六神は、ボン教の「死者の書」とも呼ばれる『バルド・トエドル・セルドン・チェンモ』にも登場する。また、「太古の十三人のシェン」というグループも、死者が死と再生のあいだに滞在する中有の期間を司る神々として信仰されている。上述のように、「シェン」というのは古い時代のボン教で、死者儀礼の司祭の名称であった。これらの「六人の教導のシェン

ン」や「太古の十三人のシェン」も、その伝統を受け継ぐものであろう。

3. 忿怒尊

ウェルセー・ガムパ (図9)

ウェルセー・ガムパはボン教でもっともポピュラーな忿怒尊で、単にウェルセーとも呼ばれる。三面十八臂そして四本の足をそなえ、展右の姿勢で立つ。身色は青黒く、三面の中央の面も同じ色である。頭上にはさらに6つの獅子の面も重なる。手にはさまざまな武器を持つが、主要な二臂は明妃を抱きながら、プルブを両手の間に持つ。明妃は緑色で一面二臂である。足の下にはやせこけた人物が踏みつけられている。持物や尊容には違いがあるが、全体的には仏教の尊格の中のヴァジュラバイラヴァに近いイメージをそなえている。主要な二臂に持つプルブというのは、先端がとがった楔状の武器で、古くからインドで呪術に用いられてきた道具でもある。結界を張るために用いられったり、人形（ひとがた）を作り、それにプルブを打ち込むことで、呪殺が行われたという。チベット仏教のニンマ派の儀礼でも、プルブを用いた修法が広く行われている。

ウェルセーはラゴ・トクパ、トウオ・ツォチョク・カーギン、プルパ、ウェルチェン・ゲコの四尊と共に「セー城の五最高神」というグループを構成することもある。

タクラ・メバル (図10)

この尊も人気の高いボン教の忿怒尊で、タンカや壁画の作例も多い。タクラ・プティマルポと呼ばれることもある。赤黒い身色を持ち、展左で立つ。持物が独特で、右手には輪を先端につけた武器、左手には何本もの剣を組み合わせた武器をそれぞれ持つ。なお、トンパシェンラプの弟子の中に同じ名称を持った人物が含まれ、成就者でもあったこの弟子が、忿怒形をとったのがタクラ・メバルであるとも言われる。

4. 護法神

護法神の多くは、チベット土着の、しかも特定の地域の土地神に起源を持つ神がみである。しかしその一方で、チベットのみならず中国やインドの神がみも取り入れられている。仏教と同じ四天王も、ボン教の護法神として寺院の壁画やタンカに描かれている。おそらく仏教起源でありながら、すでにチベット固有の護法神として信仰されているのであろう。

筆者が青海省のボン教寺院で見た2尊の護法尊を、簡単に紹介する。

シーパー・ゲルモ (図11)

シゲル・ウギャ・チャクトンとも呼ばれ、「百の頭と千の腕を持つ万物の王」を意味する。その名のとおりの尊容を持ち、さらに10本の足や火炎の光背をそなえたグロテスクな姿の女

尊である。主要な二臂のうち、右手は剣を上には振り上げ、左手は血のあふれたカパーラを胸の前に持つ。「セー城の五最高神」の中の一尊ラゴ・トクパの配偶神ともみなされ、ナムチ・グンゲルという異称も持つ。

ダクツェン (図 12)

赤い馬にまたがり、中国風の甲冑を身にまとう。右手は蛇のからまる槍を高く掲げ、左手には鳥(?)をかかえる。筆者が調査した青海省のボン教寺院では、塑像として表されているほかに、タンカに描かれ、他の 15 の護法神のタンカと共に、寺院の内部に懸けられていた。

5. 成就者、高僧、ダーキニー

高僧を描いたタンカは、チベットの絵画の中でも重要な位置を占め、チベット仏教の各派がそれぞれ多くの作品を伝えている。ゲルク派の歴代ダライラマやパンチェンラマのタンカ・セット、あるいはサキャ派の祖師像などは、その中でもよく知られている。ボン教の高僧図についての研究はこれまでほとんど手つかずの状態であったが、近年ではいくつかの研究成果が発表されている (たとえば Samten Karmay 1998)。

八十成就者図 (図 13)

チベット仏教ではインドの伝説の成就者たちを 84 人集めた「八十四成就者」が広く知られ、その説話や図像表現が流布している。ボン教でもこれに匹敵する「八十成就者」というグループをたてたのであろう。筆者が調査を行った青海省の二つのボン教寺院では、天井画として描かれた作例 (図 14) と、一幅のタンカに全員を描いた二種類の作品を確認した。両者のあいだで各人物の特徴は正確に一致しているため、下図となるような特定の図像集の存在が予想される。

ニャムメー・シェーラブ・ゲルツェン (図 15)

ニャムメー・シェーラブ・ゲルツェンはボン教の総本山であるメンリ寺院の創建者である。その図像はすでに確立し、固定化している。すなわち、僧衣をつけて結跏趺坐で坐り、頭にはボン教徒の固有の帽子である蓮華帽をかぶる。両手は胸の前に置かれ、そこから体の左右に植物が伸び、左側の植物には、経典が置かれ、右側の植物の上には直立した剣が置かれている。これらは寂静尊のひとりで、文殊と酷似したシェーラブマセンと同じ持物である。ボン教にとって、ニャムメは彼とほぼ同時代に現れたゲルク派の開祖ツォンカパに匹敵する高僧である。その尊容も、僧衣を別にすればツォンカパのそれによく似ている。また、多くのボン教徒たちがニャムメをシェーラブマセンの化身であると信奉している点も、ツォンカパを文殊の化身と見る仏教徒の信仰と同じである。

ニャムメーを中心に描いた集会樹 (チベット語でツォクシン) のタンカもある (図 16)。集

会樹はチベット独特の仏画形式の一つで、画面の中心にそれぞれの宗派の開祖や主要な尊格を描き、その回りに宗派に関連する歴史上の人物や尊格を描く。背景に樹木を大きく描くことが多いため、集会樹と呼ばれる。仏教の各派はそれぞれ固有の集会樹を伝えているが、それにならってボン教でもニャムメーの集会樹が作られたのであろう。

6. その他

説話図 (図 17)

本書第 7 章にあるように、ボン教の代表的な説話図に、トンパ・シェンラブの生涯を描いた作品があげられる。この他、ニャムメー・シェラブ・ゲルツェンの生涯をテーマにした作品も知られている。

生死輪廻図

生死輪廻図あるいは六道輪廻図は、チベットの仏教絵画でもしばしば見られる主題である。巨大な車輪が六つの領域に等分割され、それぞれに六つの生まれ変わりの世界が描かれる。周囲の輪の部分には十二因縁が象徴的に表され、また中央の軸の部分には貪瞋痴の三毒が鶏などの動物の姿で表現されている。ボン教の生死輪廻図も基本的にはこれと同じ形式を持つが、十二因縁を象徴するものが仏教とは一致しない点と、六趣の各領域で衆生を救済する仏に代わり、「六人の教導のシェン」が登場する点が異なる。

マンダラ

ボン教徒たちも仏教徒と同様に数多くのマンダラを伝えている。国立民族学博物館が所蔵するコレクションでは、全体で 131 種のマンダラを数える。ボン教のマンダラは寺院の天井などに装飾としてもしばしば描かれている (図 18)。これらのマンダラはいずれも神々を丸や点のみで表し、具体的な尊容を描かない。日本密教の用語を借りれば三昧耶形のマンダラに相当するが、全体の印象はそれよりもはるかに簡略で、ヒンドゥー教のヤントラにむしろ類似している。

オルモルンリン図 (図 19)

オルモルンリンとは「タジク」とも呼ばれ、ボン教徒の伝説のユートピアとして知られている。チベット仏教徒にとってのシャンバラ国に相当するであろう。中央に山を描き、四角い山脈や都城がこれを幾重にも取り囲んでいる。オルモルンリン図にはいくつかの形式があるが、いずれもこのような同心円的な構造をとる。須弥山を中心とした仏教世界観、とくに七重の山脈に囲まれた須弥山頂の三十三天のイメージをおそらく参考にしたのであろう。オルモルンリン図はボン教の寺院の本堂につり下げられることも多く、中には一辺が 3 メートル以上もある巨大なタンカに描かれたものもある。

7. おわりに

ボン教の神々の世界と、それを表現した作品を概観してきた。ボン教のパンテオンの全体的な構造は、おそらく寂静尊・忿怒尊という二つのカテゴリーを基本とする。これは仏教のニンマ派などにも見られるが、それぞれのカテゴリーの内部は、仏教とボン教とのあいだで一致を見ない。とくに、グループを構成する個々の神々を見た場合、仏教では同一のヒエラルキーに属する均質なメンバーで構成されるのに対し、ボン教では「四至上尊」や「十二儀軌」の神々のように、イメージや性別の差異を越えて、まとまりをもつことがある。ボン教のパンテオンに厳密な意味でのヒエラルキーそのものがあるかどうかも疑問である。むしろ、寂静尊と忿怒尊という大まかな区別を行った後は、かなり自由に複数の神がみを組み合わせて、グループを作ることが多いようである。これらはむしろ、葬送儀礼や寺院建築儀礼のような特定の儀礼を前提としたグループであることが多い。それらを中心に、土着的な地方神に起源を持つ護法神や、歴史上あるいは伝説上の人物画、マンダラや生死輪廻図など仏教美術から影響を受けた絵画が加えられて、ボン教の美術の総体ができあがったのであろう。